顕孝寺遺跡第2次調査の概要

2021.11.　　福岡市埋蔵文化財課

福岡市埋蔵文化財課では、令和3年 9 月から 11 月まで、東区多々良1丁目で発掘調査を行いました。調査中は近隣、ご通行の皆様にはご理解とご協力いただきありがとうございました。終了にあたり概要をお知らせいたします。

今回の調査地点では、丘陵端部の高まりから土器が出土したため、当初、古墳があるのではないかと考えました。調査の結果、古墳ではなく、弥生時代前期（約2500年前）の貯蔵穴6基と、古墳時代後期（6世紀後半約1400年前）の竪穴住居跡3～6棟、そして掘立柱建物1棟が出土しました。遺物もそれぞれの時代の土器、石斧、玉類などが出土しています。

調査前

最初に古墳がないか確認する作業から着手しました。木の根が行く手をはばみます。

表土、木の根などを 50 cm～30 cmほど掘ると、地山や土器を含んだ土が現れて、住居跡や穴の輪郭が見えてきました。下の写真は、確認した穴などを掘り上げた後の状況です。

東側には弥生時代の貯蔵穴が集まり、西側には古墳時代の住居跡が重なっています。住居跡は貯蔵穴より 1000 年ほど後に作られたものです。

西

東

貯蔵穴群　弥生時代　　住居跡の重なり　古墳時代

【弥生時代前期】　貯蔵穴

弥生時代の貯蔵穴は6基が東側に集まっていました。矢印⇒の先の丸い穴が貯蔵穴です。後の時代の造成などで底だけや半分しか残っていないものもあります。今回見つかったものは上端の入口より下の方が広いフラスコのような形をした弥生前期に特徴的なものです。穀物などを貯蔵していたと考えられています。

大きなもので幅 2.4m、深さ 1.4m ほどの規模です。
2基には炭化した植物繊維が底に広がっていました。貯蔵した収穫物、または敷物の跡かもしれません。

2基からは弥生土器が形を保ったまま出土しました。甕が目立ちますが、小壺が1点あります。
米や種籾などを入れていたのでしょうか。
この他に石斧と石錘(おもり)が出土しています。

石斧と甕

壺と甕

甕

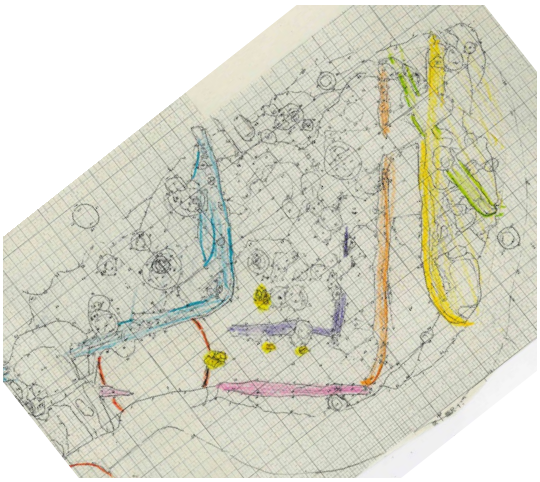
甕

【古墳時代後期】

竪穴住居

古墳時代後期の6世紀後半の住居跡は調査範囲の西側で見つかりました。ただし、全体の形が残るものはなく、壁際に掘られた溝だけが残っていたものもあります。その数は少なくとも3棟、多くて6棟ほどです。残っていた溝などから方形の竪穴であったことがわかります。

また、同じところに繰り返しつくられており、同時にあったものは多くとも2棟です。左下の写真は最大で6棟が重なった様子です。左の図には住居の壁際の溝を1棟ごとに色を変えて示しています。



竪穴住居

竪穴住居

蛸壺と甕

蛸壺

住居跡からは窯で焼かれた須恵器と野焼きの土師器の甕が出土しました。

また、蛸壺が4つ出土しています。この蛸壺は10 ㎝前後と小さなものでイイダコ獲り用です。小穴が一つあいています。

装飾品の玉類も少量ですが出土しました。

蛸壺

甕（須恵器）

甕（土師器）

滑石製の玉

掘立柱建物

竪穴住居と重なって出土した穴のうち、4つの深い穴が四隅に等間隔で並んでいました。柱立建物の跡と考えられます。4つの柱穴のうち、北側の1つからは斧と考えられる鉄器が出土しました。

鉄器（斧？）

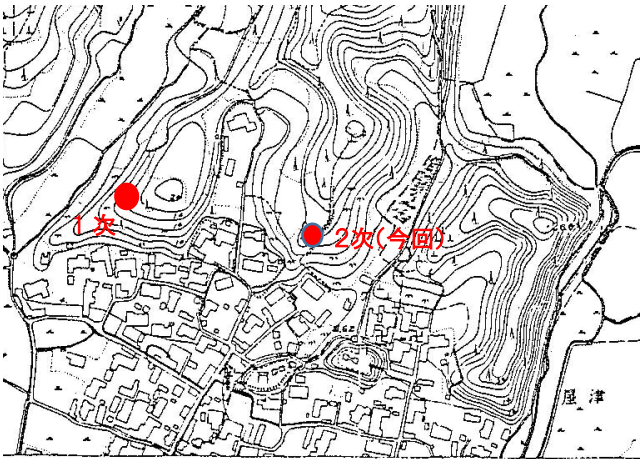
今回の 2 次調査地点は丘陵の先端部で（下の地図）、多々良川から粕屋、福岡平野を望む見晴らしの良い立地です。古墳時代の住居は、繰り返し同じ位置に建てられ、この眺望に意味があるようにも思われます。西側の丘陵上での1次調査では少し前の6世紀前半の前方後円墳が見つかっています。地図を見ると今回の丘陵の上部にも古墳があった可能性もありそうです。

弥生時代前期の貯蔵穴は 1 次調査でも出土しました。弥生時代前期には丘陵裾部の広い範囲に集落の広がりが想定できそうです。

【顕孝寺遺跡について】

顕孝寺遺跡の名称は鎌倉時代末に創建された禅宗寺院、顯考寺から取られています。これまでの発掘調査では寺院に関連する遺構は見つかっていません。

西側の丘陵上での1次調査では前記の他に、弥生時代中期の甕棺墓から青銅の武器が出土しています。



昭和初期

昭和 31 年　　国土地理院ウェブサイトデータを加工して作成

弥生時代の甕棺墓（1次調査）

甕棺出土青銅器（1次調査）